

涼山畢摩階層の特徴についての試論

バモ アイ
巴莫 阿依

彝族の歴史過程において、生産力の発展と共に、分業が出現し、職業を特徴として社会階層が分化した。例えば職人階層⁽¹⁾、徳古階層⁽²⁾、畢摩階層⁽³⁾などである。彼らは彝族の歴史の舞台において異なる役割を演じ、彝族社会の発展に対して重要な影響を与えた。畢摩とは、彝族の伝統社会において宗教活動を専門とする神職者である。彼らは比較的豊富な文化宗教知識と職業技能を有しており、人と神、人と鬼の間で宗教事務をつかさどり、生活の糧をその職業収入に頼るか、または部分的に頼っている。畢摩は人々に信仰・心理・精神面でサービスを提供するため、彝族社会の中で特殊な地位と名声を得ている。では、畢摩は神職階層として一体どのような特徴を持っているのだろうか？本論ではこのことについて分析と考察を加えたい。

1. 畢摩の持つその神職活動と関連する特殊な信仰

精霊信仰は彝族に共通する信仰であるが、畢摩は精霊を崇拝するほかに、彼ら独自の信仰を持っている。畢摩職の形成発展と共に、畢摩を神職とする観念がこれに従事する人々の脳裏に確立され、畢摩の職業上の特質や需要に適合し、畢摩の活動や利益を保護する神霊が次第に出現した。これらの神霊は畢摩達に特有の信仰対象であり、主なものとしては畢摩神、護法神、法具や經典の靈魂といったいくつかの類型が挙げられる。

畢摩神とは彝語の「畢爾」の意識であり、系譜を辿ることのできる歴代畢摩の祖霊である。彝族の伝統社会には、ある先祖以降畢摩職に従事する家族だと社会的に認められている少数の家族がある。例えば井克家、沙馬家、吉里家、的惹家等である。これらの家族には畢摩活動に従事するという伝統があり、代々畢摩職を受け継いできた。畢摩神として尊ばれる畢摩の先祖とは、すなわち各畢摩の家族の今は亡き先祖であり、かつ生前は次世代の子孫達が畢摩活動に従事した際に教師や師匠であった人のことである。彼らの靈魂はその畢摩の末裔から神霊として崇拝され、一方では祖霊神としてその子孫の繁栄を加護するとされ、もう一方では職業神として後代の畢摩の子孫が法事をうまく行い、儀式を成功させるよう加護するとされた。このように、畢摩神には祖先神と職業神の二つの特徴を持っている。血縁の伝承を重視する彝族社会においては、異なる家支家族の畢摩が信仰する畢摩神も当然家支によって異なる。この点は彝文の經典『畢此額以碼』の中からも見出される。『畢此額以碼』とは『畢摩系譜經』と訳されるが、各畢摩家族或いは家支の各畢摩必携の經典である。經典の中にはその家族家支の中で最初に畢摩に従事した先祖の記述に始まり、子弟連名の型式（一般には父子であり、特殊な場合は叔父と甥、祖父と孫）により、

※中央民族大学宗教研究所副教授

この経典を所持し使用している畢摩に至るまでが書かれている。経典は一方では畢摩達が畢摩職の家伝世襲を背景としていることの証明となり、もう一方では如何なる儀式においても、畢摩達はみなこの経典を読経或いは暗誦せねばならず、経典の中でその家族家支の歴代畢摩祖先に降臨して祭祀を助け、儀式の順調なる成功を加護するよう呼びかける。畢摩神信仰においては血縁の伝承と存続が重視され、自分と血縁関係のある畢摩祖先に対する信仰を強調する。これは明らかに彝族の祖霊信仰と畢摩の職業活動が結合した産物であるが、その働きは畢摩の父子血縁関係を確立し強化させ、その神職地位及び身分の家族家支内部での伝達継承を保証することにあった。

畢摩達は各自と血縁関係のある畢摩神を信仰するだけでなく、さらに各畢摩家族家支が輩出した名声とどろく著名な畢摩神を普遍的に崇拝している。こうした畢摩神は往々にして生前畢摩の職業活動に対して特殊な貢献をなしている。彝族の伝説においては、彼らは非凡な業績や奇異な技能を持っており、広く深い知識と高尚な徳性を兼ね備えていた。例えば儀式や儀礼の面で特殊な貢献をした体比渣姆^{テイビジャモ}(4)や海比什祖^{ハイビシズ}(5)、文字を規範化し経典を整理した畢阿蘇拉責^{ビアスラジ}(6)、祖先祭祀儀礼を生み出し祖先を祭る経典を編纂した畢摩侯榮^{ビモホウロン}(7)、呪文で大山を崩せる阿格俄莫^{アグウォモ}(8)等である。これら出身家族家支の異なる畢摩英雄達は、畢摩の代表的人物であり、構成の畢摩達の精神的指導者である。それぞれの儀式活動において、畢摩達は『畢補特依』すなわち『畢摩献神經』を読経し、これら著名な畢摩神に祭りを助け、儀式の成功を加護するよう呼びかけねばならない。これらの著名な畢摩神に対する信仰は、畢摩神信仰の一つの類型でもある。こうした畢摩神は彝語で「畢爾」と呼ばれている。このように血縁の壁を打ち破り、家支家族を超越し、功德神跡を基礎とした畢摩信仰は、英雄崇拜と畢摩の職業活動が結合した産物である。その働きは畢摩職に従事する者の職業への敬意を触発・増強し、畢摩達が歴史的に著名な畢摩の業績を手本とし、勉強し業務に専念するよう鼓舞することにある。

護法神とは畢摩が法事を行うのを助ける神霊を指すが、彝語ではこれを「木爾木色」と呼ぶが、これは自然界の様々な神霊という意味であり、天神、地神、山神、岩神、雨神、雷神、樹神、鷹神等である。これらの神霊は本来彝族が普遍的に信仰していた自然神であり、それぞれ異なる職掌を持っている。しかし畢摩は彼らを自分たちの活動の中に取り込み、護法神として奉った。各儀式において畢摩達は神枝を挿すという方式でこれらの護法神の神座を設置し、護法神に降臨して祭祀を助けるよう呼び寄せる。各儀式でどの自然神を呼び寄せるか、どれだけの自然神が護法のためにくるのかについては、儀式の性質や規模及び儀式の生け贄の種類大小の違いによって定める。例えば「曉普」の呪い返しなどの小型の儀式を行うには、一羽の雄鳥だけを生け贄にするので、近くの山神を護法に呼ぶだけである。例えば「撮日」の呪詛^{ツオリ}など大型の儀式を行うには、牛や山羊などを生け贄とするので、天神、地神、岩神、樹神など多くの神霊に祭祀を助けに来てもらわねばならない。このため、専門の経典である『木爾木色畢』すなわち『請神經』及び『莫果莫社特依』すなわち『招兵請將經』がある。自然神は護法神とされ、一時的な特質を持っている。畢摩達はこれと呼び寄せ、また追い払う。儀式の中ではそれ本来の職掌は次第に護法神として畢摩の法事を助けるものへと変わっていったのである。

法具の靈魂と經典の靈魂に対する信仰も畢摩達に特殊な信仰である。法具と經典は畢摩が活動する上での手段でありまた根拠である。彝文經典『畢普特依』の記載によると、「太古の女里⁽⁹⁾、什叟⁽¹⁰⁾、莫木⁽¹¹⁾、格俄⁽¹²⁾といった時代にはみな畢摩をやる人がいたが、金水鼓⁽¹³⁾を置かず、骨卜⁽¹⁴⁾を行わず、杉箒筒⁽¹⁵⁾を携帯せず、竹神扇⁽¹⁶⁾を持たず、神斗笠⁽¹⁷⁾をかぶらず、神鈴⁽¹⁸⁾を鳴らさず、經典を読まなかったため、鬼払いをしても鬼は去らず、福を祈っても福は到来せず、病を治しても病は癒えなかったのであり、布⁽¹⁹⁾時代に至ってようやく上述の諸々の法具や經典が現れた」という。畢摩は法具や經典の法力を借りて、病を取り除き鬼を払い、魂を呼び寄せ福を招来するなど、何でもできるようになったのである。法具や經典の持つ法力は、畢摩の見たところ単にその特殊な形態に由来するのではなく、法具や經典の形態の中に躍動する靈魂が潜んでいるからである。魂が去ると法力は失われ、魂が傷つけられたり汚されたりすると、その法力にも影響が及ぶ。法具や經典に対して祭祀を行い、法具や經典の靈魂を呼び寄せ、法具や經典の汚れを除くといった儀式行為はつまりこうした信仰を基礎として生まれたのである。法具の製作、使用、収蔵、及び經典の書写、流通などに関連した多くの規定や禁忌はこうした信仰の現れである。

総じて、畢摩神、護法神及び法具と經典の靈魂に対する信仰は畢摩階層に特有の信仰である。これらの信仰は畢摩内部の全員が厳守すべきものであり、畢摩が神職活動に従事する上での信仰の力であり、畢摩階層が存続し発展して行く上での精神的支柱なのである。

2. 畢摩内部に定着した特殊な宗教制度

長期にわたり宗教を執り行う中で、畢摩共同体の存続と発展を維持し、畢摩構成員の宗教神職活動を指導するために、畢摩の内部では次第に特殊な宗教制度が形成された。これらの制度はある機構が意図的に作った強制力のある規則ではなく、畢摩がその神職活動の中で自然に形成した慣習制度である。これらの慣習制度は畢摩の神職としての役割や職業活動と関連しており、畢摩構成員の行為の基準と依拠を確定している。それらは主に畢摩のしきたりと儀礼次第の二つの方面の内容を含んでいる。

畢摩の慣習制度とは畢摩自身及びその活動に関する習慣的な規定と制度を指す。筆者の初歩的な研究によると、畢摩を伝承する際の習わし、「畢階^{ビジェ}」という畢摩に従事する際の習わし、「畢徹^{ビチエ}」という畢摩をやめる際の習わし、及び「畢幾^{ビジ}」という畢摩行脚の習わし等がすなわち畢摩内部で共同で信奉し遵守すべき慣習制度である。

畢摩を伝承する際の習わしは、畢摩の神職としての地位や身分の伝達と継承に関連する習慣規定である。我々は、古い世代の畢摩は結局年老いて死んでしまうのは、逆らうことのできない自然の法則であることを知っている。では、畢摩の地位や身分は一体どうやって伝達し継承するのだろうか？誰が畢摩職を受け継ぎ、畢摩活動に従事する資格を持つのだろうか？畢摩集団には新たな構成員の吸収や補充に際して自らが伝承する原則を持っている。第一に、男子に伝承し女子に伝承しない。彝族社会の父兄伝承制度に対応して、畢摩の伝承では男子に伝承し女子に伝承し

ないという原則を奉じている。彝族の人から見れば、畢摩職は神聖な職業であり、必ず一族内で伝達継承し、家族家支が畢摩の家系という名誉と地位を永久に保持せねばならない。女性は十七歳以降は嫁いだか否かに関係なくもう父方の家族の構成員とはみなされず、従って畢摩の神職としての身分や地位を継承する権力も機会もないのである。第二に、畢摩は家系伝承を主体とする。畢摩の伝承は畢摩の家系の家伝を主とし、少数の畢摩家系が畢摩職に従事する特権を永遠に持つことを保証している。第三に、畢摩の家系でない者への伝承を補助的に行っている。畢摩の家系でない人はある状況の下では家伝を背景としている畢摩に師事して畢を学ぶ。彝語ではこうした畢摩を「此畢」と呼ぶが、それは正統でない畢摩という意味である。「此畢」は畢摩の中でも地位が非常に低く、同じ血縁の畢摩の先祖の祭祀援助や護法がなく、祖先伝来の法具や経典もないので、法力が強くなく、祖先祭祀を執り行ったり、人や鬼を呪詛したり、魂を呼び寄せるといった大がかりで重要な儀式を行うことができない。「此畢」は大抵その人一代が畢を行い、畢摩の職を子孫に伝えることができず、永久に畢摩の家系として発展することができない。これまで見てきた畢摩伝承のいくつかの原則から、畢摩伝承を決定する主な要因は血縁関係と特権意識であることが容易に見て取れる。畢摩というこの職業を特徴として形成された神階階層は、ついに血縁の囲いから出ることなく、彝族の家族家支の血縁紐帯から離脱できずにずっとこの因縁を巡り続けているのである。

「畢階」の慣習と「畢徹」の慣習は畢摩が畢に従事したり畢をやめることに関連した習わしである。畢摩という職業は人々と神や鬼の間を取り持つ神聖な職業であり、勝手に参入したり脱退することができない。その就業と退業においては一定の慣習規定とそれに伴う一定の儀礼行為が存在する。畢に就いて仕事を始めるには、必ず長期間の教育と訓練を経ねばならず、彝語ではこれを「畢洛」と呼ぶが、これは畢を学ぶという意味である⁽²⁰⁾。畢を学ぶ間に、生徒は畢摩に関する知識や技能を学ぶ一方、畢摩の道德規範を熟知し、一定の役割認識を育てる。もし師匠がこの学生は単独で畢や法事を行えると見なせば、一人立ちできるのであり、彝語ではこれを「畢階」といい、「畢階畢洛」という出師祭神儀式を挙げる。儀式では近遠の畢摩や親友に参加してもらい、生徒は新しい身分と職責を獲得したという事実を社会に公にする。儀式において、師匠は法具と経典を学生に贈り、畢摩神・護法神・法具と経典の靈魂に降臨してもらって祭り、同時に儀式に出席した人々や各種の神靈に向かい、この学生が既に学業を完成して一人立ちして畢摩となれることを知らせ、神靈たちにこの人の法事が成功し儀式が順調に行くよう加護することを祈る。師匠、神靈、社会の三方面の認可を経て、畢摩集団は新たな構成員を補充し、受け入れるのである。

「畢徹」は畢を棄てる、または畢を戒めるという意味であり、畢摩を辞めることに関連する制度である。畢摩は一般に終身的な職業であるが、畢を放棄し仕事を辞める場合は二つの情況が挙げられる。一つはある畢摩がその靈魂や畢摩神、護法神及び法具や経典の靈魂と不和であるために、畢を執り行ってもうまく行かず、儀式の主催者により縁起や平安をもたらすことができず、畢摩本人やその家庭も畢によって災難が起きる。このため仕事を辞めて畢を棄てるというもので

ある。しかしその子孫は畢摩職を続けることができる。二つ目は、世襲畢摩の末裔が諸々の原因により、三代にわたり畢を学び畢を行うものがいないというもので、儀式を挙行して畢を放棄し、子々孫々まで永遠に畢摩となる資格と権力を放棄せねばならない。畢を放棄するには「畢刹^{ビシヤ}」という儀礼活動を伴う。「畢刹」とは畢摩を助けて法事を行ってきた様々な神霊を祭って送り出すという意味である。この儀式は前述の「畢洛」就業儀式と同じく、畢摩（別の畢摩にこの儀式を主催してもらう）、神霊、社会の三方面の認可を経て、この畢摩と諸々の神霊との関係を解除し、畢摩職を放棄したことを宣布せねばならない。祭礼が終わると、各種の神霊を代表する神枝及び経典と法具を遠くの山奥に送る。

「畢幾」の習わしは畢摩と畢摩の間、及び畢摩とその他の社会組織の間の相互関係を調整する慣習制度である。「畢幾」は畢摩の行脚と訳すことができる。我々は、畢摩の神職活動には独立性、分散性、移動性という特質がある。畢摩達は村々を渡り歩き主人の家の要請に応じて行脚して法事を行い、よく数ヶ月も帰らないことがある。では、畢摩と畢摩の間で畢を行う地域や範囲及び家族をどのように協調させているのだろうか？甲を主人とする畢摩は乙を主人とする地盤や敵対する家支の領地では畢を行えるだろうか？もし甲の畢摩が乙の畢摩が畢主⁽²¹⁾となっている家で臨時に儀礼を行う場合、「畢幾」の慣習規定に基づき、儀式の報酬（生け贄或いは貨幣）の一部を乙の畢摩に渡す。もし長期間儀礼を行い、乙の畢摩に代わって畢主となった場合、儀式を主催した家と甲の畢摩は一定の補償金を乙の畢摩に支払い、乙の畢摩はその畢主としての地位を放棄せねばならない。大小涼山の彝族地区では、人々は大体家支や家族ごとに集住しており、各黒彝家支や土司はいずれも自分たちの勢力範囲を持っている。畢摩の家支は一般にどこかの黒彝家支や土司に付随している。各地に分布し数もあまり多くない畢摩家支は広大な彝族地区の各家支家庭の儀式を行う任務を負っている。「畢幾」の畢摩行脚の習わしにより、ただ頭に神笠をかぶり、手に神扇を持ち、背に経囊を負い、肩に神籤筒を掛けており、畢摩の系譜を暗誦できる畢摩であれば、いずれも彝族地区のどの村、どの家族においても儀式を行うことができ、誰も干渉したり阻止したりできない。もし畢摩の活動を妨げたり、行脚する畢摩を傷つける事件が出現したりした場合、習慣法により厳罰に処される。時には戦争を誘発したり、ついには全ての畢摩家支が連合して宗教的手段——呪詛によって、相手方を死地に追いやるのである。このため畢摩は彝族地区で行脚して儀式を行う際に、安全に通行し、普遍的に人々の尊重と保護を受けるのである。

畢摩のしきたりとは畢摩が各種の儀礼活動に従事する祭に必ず遵守すべき儀式次第と規定をまとめたもので、畢摩はこれを「畢階莫階^{ビジュモジェ}」と呼ぶが、これは法事を行う法規あるいは儀式の原則という意味である。彝族の宗教儀式は複雑かつ多様であり、儀式の次第は神秘的で煩瑣である。長期間の儀式生活において、畢摩達の様々な儀式活動と行為は次第に画一化され、比較的固定した式次第と規範を形成した。儀式次第から見ると、各種の儀式は大体以下の項目にまとめることができる。1.「木古比^{モコヒ}」すなわち花火に点火して神を迎えて法事を助けてもらう⁽²²⁾。2.「爾擦蘇^{ニツァス}」すなわち清めの儀式⁽²³⁾。3.「燕爾」すなわち儀礼開始の科白⁽²⁴⁾。4.「特」すなわち神霊と調和する儀式⁽²⁵⁾。5.「木爾木色畢」すなわち神に法事の助けを請う⁽²⁶⁾。6.生け贄の献上（活きたま

ま献ずる)⁽²⁷⁾。7.読経し儀礼を行う。8.生け贄の献上(打ち殺して生のまま献ずる)。9.読経して儀礼を行う。10.生け贄の献上(焼いたり煮たりして火を通したものを献ずる)。11.神を安んじさせて送る。12.「長巴切」すなわち畢摩に報酬を渡す。儀式の様々な不文規則を見ると、例えば儀式の日取りの選び方や生け贄の選び方は厳格に取り決められている。大がかりな儀式は日を選ぶ必要があるだけでなく、月や年、時刻も選ばねばならない。儀式の生け贄も雄雌、毛色、年齢、重さ、種類にこだわる。生け贄の捧げ方には活きたものの献上、生のものの献上、火を通したものの献上、血を祭る、角を祭る等々がある。さらに、各種の儀式では樹の枝を挿して儀式の場を作るが、儀式が違ふと必要な樹の枝の種類も異なり、数も違えば、挿し方も違い、象徴する内容も違ってくる。畢摩に報酬を送る制度も重要な儀礼のしきたりである。畢摩への報酬には労務、現物、貨幣の三種類がある。畢摩に渡す報酬は畢摩の神職活動に対する承認と答礼である。しかし畢摩に与える報酬の種類や数量は、儀式の性質と規模、用いた生け贄の多さ、さらには畢摩と主催者の関係によって決まるのであり、一定の慣習規定があつて、畢摩も法外な値段をせびつたりはできないのである。畢摩への報酬制度の形成は畢摩の宗教活動が職業化したことを反映している。

畢摩の伝承、一人立ち、退業、行脚の慣習及び畢摩儀式のしきたりに関連した制度規定は、畢摩の神職行為と活動を統一化、規範化、秩序化、自覚化させるものであり、畢摩という神職共同体が存続してゆくための重要な保障となっている。

3. 畢摩階層の共同で遵守する宗教職業道徳

畢摩構成員が共同で遵守する集団規範は畢摩の慣習制度やしきたりのほかに、さらに畢摩の道徳という型式で出現する。畢摩の道徳はその性質から、一種の宗教職業道徳であるといえる。職業活動において、畢摩は神鬼や人々と交流するだけでなく、他の畢摩とも関係を持っている。そのため、三種の基本的な職業関係が出来上がったのであるが、それは畢摩と神鬼、畢摩と「維色」(すなわち儀式の主催者)、畢摩と畢摩の間の関係である。畢摩の職業活動における各種の関係を調節し、畢摩職の信用と神職としての尊厳を維持するために、畢摩の職業行為を調節、指導、制約する神職道徳がゆっくと芽生え、次第に形成されていった。

我々は、彝族の宗教信仰が功利的色彩を濃厚に帯びていることを知っている。人々は祖先を崇拜し神鬼を信仰するが、その目的は現世の平安と幸福を求めることにある。宗教職業者として、畢摩の任務と使命は人々が自信の解脱や魂の救済を獲得したり、死後に天国へゆくのを助けることにあるのでなく、人々が吉を得て凶を避け、禍を除いて福を納め、五穀豊穰、家畜の繁殖、人々の繁栄、家族の壮大な現実的需要を実現することにある。人々の生存と発展のために信仰や精神面での支えや満足感を与えるのである。ある畢摩の諺には、「儀式三日で便りを聞く、主人は幸福で平安であるかと」というものがある。ここから、畢摩職は神霊に対して責任を負い、神霊のために働くというより、むしろ人々に対して責任を負い、儀式の主催者のために働くといえる。畢摩の神職道徳とはつまり畢摩の職責を巡って打ち立てられたもので、畢摩職の性質や特質と緊

密に関連した行動規範である。それには以下の内容が含まれる。

1. 神職に愛着を持ち、職務に忠実であること。先に述べたように、畢摩の宗教職業活動は人々がその生存発展をある意味で信仰に依託したものである。このことは畢摩達に彼らの従事している職業の社会的価値を充分認識、感情の上からも神職に対する愛着を深め、職業に対する誇りや神職に従事するしっかりした考えを持つよう求める。畢摩には職業活動において高度な責任感を持つことが要求され、儀式主催者が焦るときは焦り、儀式主催者が憂う時は憂い、儀式活動に対しては真剣に責任を負い、仔細に至るまで周到に行う。もし怠けてごまかしたり、いい加減に済ませたり、遊び半分でやったならば、儀式にも遺漏が生じ、主催者やさらには畢摩自身にも不幸や災難がもたらされるのである。畢摩の諺にも、「経文を削減すれば畢摩が傷つき、神杖が足りなければ主催者を害する」とある。神職に愛着を持ち、職務に忠実であることは、畢摩職に従事する上での基本的な道徳的要求である。

2. 分け隔てなく、対等に人に接する。彝族の伝統社会では、どの等級、どの家族、どの人もみな畢摩を必要とする。畢摩が奉仕する対象はかなり広範である。人々は高度な技術を持ち、品や徳の優れた畢摩を選んで儀式をやってもらうことができるが、畢摩は儀式や儀式の主催者を選ぶことが許されない。諺にも「駿馬は走る道を選ばず、徳古は遭遇する糾紛を選ばず、畢摩は儀式を頼みに来る主催者を選ばない」とある。対等に人に応対することは畢摩の職業道徳の中でも重要な規範の一つである。具体的な要求としては、畢摩が儀式をやるのに貧富の別、貴賤の別、親疎の差を問わないということである。もし貧者を嫌い富裕者を好み、差別的に対応すると、社会や畢摩達から非難や譴責を浴びる。人々は彼を冷遇し、二度と彼に儀式をやってもらわない。同業者も彼を蔑視し、二度と彼と技芸を切磋しない。畢摩達が人々から普遍的に尊重されるのは、人々がその神性に畏敬の念を抱くからだけでなく、畢摩達のほとんどが人を対等に扱うという品性にも起因している。

3. 誠実に信用を獲得し、畢約⁽²⁸⁾を遵守する。誠実に信用を得て、約束を遵守することは、畢摩の職業活動の中で決定されたものであり、社会が畢摩に対して提示する最低限の道徳的要求でもある。彝族の宗教儀式は一般的に先に計算して日取りを選び、数日或いは十数日前に主催者あるいは代理人が畢摩に通知する。「格非依此畢」という赤子の魂を呼び寄せる儀式のような特殊な儀式の場合は一年前に決めておかねばならない。畢摩はいつでも経囊を背負い、法具を肩に掛けて約束通り法事を行う。畢摩の活動は人々から人の憂いを解き、人の危機を救ってくれると考えられている。そのため、道中がいかにか険しく困難であろうと、天気がかにか悪くて厳しくても、家でどんなに重要なことがあっても、畢摩は必ず時間通りにそこへ行かねばならない。畢摩としては言った以上信用を必ず守らねばならないのであり、約束を破り信用に背くことは恥なのである。彝族の諺には「畢を請い、畢に来なければ殺してもかまわない」とあり⁽²⁹⁾、もし言っただけで信用を守らねば、みな信任を得ることができず、後日だれも法事を頼まなくなり、畢摩としての地位と身分を失うことになるのである。

4. 同業者を尊重し、互いを敬い助け合う。同業者を尊重し、互いを敬い助け合うことは、畢

摩と畢摩の間の相互関係を調節する行動規範である。彝族の諺には「知識の面では、畢に大小の別はない」という。畢摩集団においては、互いに学習し、長所を取り入れることが提唱される。多くの畢摩が一生の内に数回あるいは十数回あちこちを遊歴して名士を訪ね、広く經典を探し、各家の長所を自分の中に取り入れる。大がかりな儀式があるたびに、近遠の畢摩達はこれを聞きつけて集まり、義務として法事を手伝い、技芸を切磋琢磨し、經書を互いに転写する。「蘇尼⁽³⁰⁾は仇同士だが、畢摩は味方同士である」というが、彝族社会においては蘇尼は同行すると互いに攻撃し遭うが、畢摩は同行すると互いに学習交流するとみなされている。これは、他の畢摩を勝手に攻撃したり侮蔑するような行為は、畢摩達の糾弾や譴責を受けるからだと考えられる。互いを尊重し学習しあうことは畢摩内部の連繋と団結を増強するのである。

5. 挙動は厳粛にし、行為は純正にする。挙動を厳粛にし、行為を純正にすることは畢摩の言葉、飲食、性などの面に関連する道徳的要求である。畢摩は人と神鬼の仲介者であり、一定の神性を備えている。その日常生活における挙動や言動、行為活動はいずれも俗世を超越した特性を明確にし、畢摩の神聖さを表現し、神靈の認可と人々の信頼を獲得せねばならない。そのため、畢摩が汚い話や、小言、是非を語ることが忌避される。でないと、この畢摩は「古阿格」すなわち口が堅くない上に落ち着きがなく、神靈や人々が信任するに値しないとみなされる。畢摩が虎、熊、犬、猫などの蹄のない動物を食べたり殺すことは禁じられている。でないと、畢摩は汚れ、神靈は加護せず、法力は失われる。畢摩は窃盗行為が禁止されている。畢摩が男女関係でふしだらであることは忌避される。畢摩神や護法神はこうした畢摩を加護しないのである。靈魂を送ったり先祖を祭るといった大がかりな儀式の際には、儀式前夜と儀式の過程において、畢摩は性生活を営むことが禁じられており、でないと、畢摩は不潔なために、祖靈は汚され、元の場所に戻れなくなってしまう。儀式中に畢摩が酔うことは禁じられるが、儀式に責任を持ってなくなるからである。彝族の諺には「畢が歪むと魔に勝てない」とあるが、これはつまり畢摩の行為がよくなないと神靈の加護を失い、妖怪変化に太刀打ちできないことを言っているのである。

6. 苦勞を堪え忍ぶ。畢摩という職業はかなりつらい仕事である。行脚に出かければ、約束を守って時間通りに法事を行わねばならず、野宿し昼夜兼行で移動せねばならない。一回の法事を行うために、往々にして一日二日かけて、ようやく儀式を行う場所に到着する。筆者は畢摩の先生に随行して行脚に出かけたが、歩行と乗馬ですっかり疲れてしまい、馬から下りると両足が痺れてしまい、歩くことができなかった。大がかりな儀式ではさらに数日から十数日かかり、昼夜を問わず移動を続けて遅れないようにせねばならない。時には幾晩も徹夜するので眠くてたまらず、人知れず苦しまねばならない。ある学生は畢を学んでいる期間中、苦痛に耐えられず、疲れてたまらなくなり、半ばで放棄し、畢を学ぶことを辞めてしまう。立派な畢摩となるには不屈の克己力と苦勞を堪え忍ぶ品徳が必要なのである。

7. 金銭に貪欲にならない。言い伝えでは、早期の畢摩は無償で法事を行い、報酬を受け取らなかった。しかし社会の発展や畢摩職の形成と固定化に伴い、畢摩は生活の糧としてその儀式収入に頼ったり、部分的に頼っている。職業活動であるからには一定の報酬を受け取らねばなら

い。畢摩への報酬の内容と数量は習俗伝統によって決まっている。畢摩と主催者が報酬面でもめることはタブーとされる。畢摩が主催者に対して高額な報酬を要求することは禁止され、畢摩に報酬を支払う力のない主催者に対しても、畢摩は同様に職責を全うしてきちんと儀式を行わねばならない。「主催者と報酬のことで争ってはならない」というのが畢摩達の口癖であり、また畢摩が遵守すべき道德原則なのである。

畢摩の道德は畢摩の神職活動を基礎とし、畢摩職に従事する人々の特殊な道德的要求を反映し、神職業としての特徴を持っている。職業道德を実践する中で、畢摩達は比較的安定した神職心理と習慣を形成し、畢摩階層に独特の品德と平静かつ沈着で、同情心と責任感にあふれた人格の特徴を作り上げたのである。

4. 畢摩の持つ集団アイデンティティと帰属意識

彝族の伝統社会は血縁を紐帯として形成されている。その最も基本的な集団アイデンティティは血縁の家支アイデンティティや家族のアイデンティティと同一である。畢摩は家族家支の一員である一方、神職者でもある。家族家支の一員である以上、畢摩はその家族家支のアイデンティティと帰属意識を持っている。神職者であるため、畢摩は既に血縁の垣根を越えており、職業関係すなわち宗教職業を紐帯として結びつき、また神職共同体に対する一定のアイデンティティと帰属意識を持っている。このように二つの異なるアイデンティティと帰属意識が存在するのであるが、それは畢摩の畢摩集団に対するアイデンティティが、主に同一血縁の畢摩家族に対するアイデンティティを上げたものだからである。言い換えると、畢摩の家族は畢摩階層が存在するための社会的形態であり、畢摩のアイデンティティは各畢摩家族に対するアイデンティティが畢摩集団全体に対するアイデンティティへと移行したものである。そのため、この二つの異なるアイデンティティは当然互いに結びつきかけを持っており、畢摩の血縁アイデンティティと神職アイデンティティはある方面では一致するのである。

畢摩が同職であること、すなわち畢摩が同じ職業に従事しているということは、畢摩のアイデンティティの基礎でありまた核心である。先に述べたように、畢摩は神職の仕事に従事し、人と神、人と鬼の仲介役となり、信仰に関することを処理し、人のために平安と幸福を祈る。長い間の宗教実践活動の中で、畢摩達は共通する特有の信仰を形成し、一致した習俗制度や道德規範及びよく似た儀礼行為を作り上げた。これはそれぞれの畢摩に皆が相似性を持ち、同一の身分を持ち、同一の職業集団に属していると感じさせ、「我々は畢摩である」とか「我々畢摩」といったアイデンティティ心理や意識を形成したのである。

こうした心理や意識はその他の集団との区別や連繫によって強めることができる。彝族の人々はそこで自民族を系統別に分類しており、すなわち、すべての彝族が「畢摩」と「着着」^{ジョジョ}の二つに大きく分けられるのである⁽³¹⁾。畢摩のほかは全ての彝族が出身階層を問わず、どの等級であっても「着着」の範疇に含まれる。我々は、畢摩の資格と身分は神霊・社会・畢摩の三方面からの認可を経ねばならないことを見てきた。したがって畢摩集団と「着着」の境界線は明確ではつき

りしている。どの家族が畢摩になれるのか？どの家族は畢摩になれないのか？誰が畢摩か？誰が畢摩でないのか？当事者、神霊（彝族の言い方による）、そして皆がちゃんと知っている。畢摩と「着着」は異なる身分、責任と義務を持っている。畢摩は自分と神鬼を結びつけた仕事により、人々のために「福をもたら」し、自らの地位と生活を維持するのである。「着着」は畢摩の仕事によって「平安と幸福」を獲得し、またそのために報酬を支払い、畢摩を養うのである。このように、畢摩は「着着」のために存在するのである。畢摩集団のアイデンティティは「着着」との交流と互助の基礎の上に打ち立てられたものなのである。

畢摩の集団アイデンティティはまた畢摩同士で相互に支持し援助することで表現される。畢摩階層とは自発的に形成された専門的な知識と技芸を持つ職能集団であり、固定した宗教活動の場所を持たず、またいかなる専門的な神職機構もなく、内部構造は緩やかである。しかし、畢摩達の神職としての仕事は分散、独立、遊動という特性を持っている。しかし、畢摩集団内部では依然経常的な交流と結びつきがある。例えば師弟間の指導伝授、儀礼における相互協力、技芸方面での切磋琢磨、經典の相互抄写、名だたる名士への訪問といった風習等である。こうした交際と互助の形式は畢摩の集団アイデンティティの結果であるだけでなく、同時に畢摩のアイデンティティを導き出す原因でもある。この階層の神聖な地位を維持し、自分たちの利益を保護するために、畢摩集団はある程度結びつき、「委吐蒙格」という畢摩互助の集会形式を出現させた。「委吐」とは畢摩の法具である神籙筒のことであるが、それは畢摩の象徴である。「蒙格」とは会議集會を指す。「委吐蒙格」とはつまり畢摩会議のことである。この会議は「畢摩の嫁が誘拐された、畢摩が殺された、畢摩の髪が切られた、畢摩の財産が盗まれた、法具を盗られた」といった状況下で臨時的に開催される。一般的には事件が起きた現地で挙行される。通知を受けたりこの事件を知っている近遠の畢摩や畢摩の弟子は全て参加せねばならない。会議に参加する畢摩は等級、家族、大小を問わない。例えば1921年に布施県衣某区木得阿普村の曲諾である畢摩の吉爾烏慈の漢人下僕がさらわれ売られてしまった。吉爾烏慈が呼びかけ、「委吐蒙格」が開催された。布施県内の畢摩各家族百人余りが呼びかけに応じて参加した。会議は比較的名高い畢摩が司會をつとめた。その場で呪いの儀式を行って疑わしい対象を呪詛したほか、連れ去られた下僕の名前と事件の発生した時間や場所を、呪いの書（彝語で「撮日特依」と言う）の上に書き込み、参加した各畢摩に渡した。以後会に参加した畢摩は全て、どこの家で宗教儀式を行う場合でも、常に呪いの書を手にして呪詛し、事件を起こしたものが呪い死にするまでずっと続けた。話によると、この畢摩会議が開催されたとき、ある畢摩は儀式があって参加できなかったが、板に書いた呪いの書（彝語で「撮日薩畢」と言う）を道端の大樹の上に掛け、声援を送らねばならなかった。「委吐蒙格」は畢摩達の団結互助の象徴であり、また畢摩集団がアイデンティティと帰属意識を持っていることの表れでもある。

畢摩の集団アイデンティティは職業関係を基礎とした神職アイデンティティである。こうしたアイデンティティは畢摩集団の自我意識の一つであり、畢摩階層の利益、願望及び要求を反映している。畢摩の集団アイデンティティは畢摩が団結し凝集する心理的・精神的な力なのである。

まとめると、彝族の畢摩は神職階層であり、彝族伝統社会独自の産物である。宗教職業活動において、畢摩階層はその特徴を形成した。第一に、畢摩階層はその神職活動と密接に関係する独自の信仰を持っている。この信仰は畢摩神、護法神及び法具と經典の靈魂への崇拝を主な内容とし、畢摩全体が厳守し、畢摩が神職活動に従事する上での精神的支柱となっている。第二に、畢摩内部には習慣として定着した特殊な宗教制度がある。この制度は畢摩の伝承、独立、退業、行脚に関する習わしや畢摩儀式に関する制度規定である。これらの制度は畢摩の神職行為を統一化・規範化させ、畢摩階層が存続し発展してゆくための重要な保障となっている。第三に、畢摩には共同で遵守する宗教職業道徳がある。この道徳規範は畢摩と神靈、畢摩と人々、畢摩と畢摩の関係を調節するもので、神職行為の特徴を持っている。その作用は畢摩の職業上の信用と神職としての尊厳を維持することにある。第四に、畢摩は職業関係を基礎とする神職アイデンティティを作り上げている。このアイデンティティは畢摩集団の自我意識の一種であり、畢摩が団結し凝集するための心理的力であり、また感情的紐帯なのである。

註

- (1) 職人を彝語では「格惹」と呼び、銀職人、鍛冶、大工及び口弦、楽器、食器を専門に製作する職人を含む。
- (2) 徳古とは彝語に漢語の音を当てたものである。彝族の諺では、「漢人地区では長官が偉いが、彝族地区では徳古が偉い」という。徳古とは凉山彝族社会において知略にたけ、弁舌巧みで、家支内部や家支間の様々な糾紛を専門的に解決する人である。
- (3) 彝族の伝統社会とは、民主改革以前の彝族社会、及び今日でも辺鄙で伝統社会の色合いを濃厚に残している山間部の彝族社会を指す。
- (4) (5) (6) (7) (8) いずれも伝説に見られる彝族の歴史的に有名な畢摩である。
- (9) (10) (11) (12) (19) 伝説に見られる彝族における歴史時代の名称である。
- (13) 伝説や彝文の文献に見られる法具の一種であるが、今日では既に消失している。
- (14) 彝族における占卜の一種である。
- (15) (16) (17) (18) 彝族畢摩の法具であり、今日でも使用されている。
- (20) 拙論「試論彝族畢摩伝承和教育」(『民族教育研究』1994年第3期所収)を参照。
- (21) 畢主とは彝語の「畢色」に漢語の音を当てたものである。畢主とはある家の固定的な畢摩を指す。
- (22) 紫煙を立ち上らせて神靈達に祭祀を手助けにくるよう通知するものである。縁起の悪い儀式では野草や樹の枝で煙を起し、縁起の良い儀式では穀物の藁で煙を起す。
- (23) すなわち熱く焼いた石を水瓢箪の中に入れ、沸騰した蒸気によって儀式場、儀式用具、生け贄及び儀式参加者を清潔にする。
- (24) 「燕爾」とは直訳すると挨拶のことであり、毎回儀式が始まる前に、畢摩は主催者の家の様々な神靈に向かい、儀式の内容と儀式の目的を説明し、これらの神靈に協力してもらう。

- (25) つまり主催者の家の神霊と、畢摩が呼び寄せた様々な神霊との関係のことである。もし双方の神霊の仲が悪いと、儀式は成功し難い。主催者側の神霊には例えば男子の守護神、女子の生育魂、五穀神、六畜神、武器の神、首飾りの神等々である。
- (26) すなわち各種の自然神に祭祀を助けに来てもらうことである。
- (27) 彝族の生け贅の捧げ方は、活きたまま献上、生のまま献上、火を通した後献上の順である。
- (28) 儀式の前に主催者の家と畢摩が儀式の時間、場所と内容を口頭で約束し、当日畢摩は約束通り儀式を行うというもので、これを「畢約」という。
- (29) これは習慣法の一つである。もし畢摩と儀式を約束し、畢摩が理由なくして約束を違えたならば、その畢摩を殺してもよい。
- (30) 彝族地区のシャーマンに類似した巫術師。
- (31) 「畢摩」と「着着」に分ける以外にも別の分け方があり、それは「茲(=君主・土司)，莫(=臣，黒彝)，畢(=畢摩)，格(=職人)，着(=白彝)」の五つの社会階層に分けるものである。

(翻訳 筑波大学大学院 歴史・人類学研究科 上野 稔弘)



ピモ経典を読む畢摩
酒庫郷尔覚村
(97/9/13)



スニの実演
酒庫郷尔覚村
(97/9/13)